

Cinema

映画

「死の問題」に目を背けないで

人生の最期をどう選ぶのか、というテーマをユーモラスに描くイスラエル映画「ハッピーエンドの選び方」(1時間33分)が28日から大阪のテアトル梅田ほかで公開される。穏やかな死の迎え方についての執筆や講演を続ける兵庫県尼崎市の医師、長尾和宏さん(57)

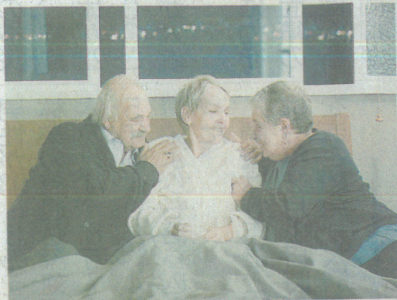


尾和宏さん(57)

「写真」は「たくさんのテーマを持った作品。目を背けてしまいがちな死の問題を考えるきっかけになる。医療を志す学生など多くの人に見てほしい映画だと思う」とその魅力を語る。発明好きなヨヘスケルは、妻

医師・長尾和宏さんに聞く

「ハッピーエンドの選び方」が描くもの



©2014 PIE FILMS/2-TEAM PRODUCTIONS/PALLAS FILM/TWENTY TWENTY VISION.

と仲良くエルサレムの老人ホームで暮らしている。ある日、親友マックスが望まぬ延命治療を受けているのを目撃。その妻やナからも「夫を苦しみから解放して」と懇願され、苦しまずに最期を迎える装置を發明する。法律では殺人罪に当たることを

覚悟の上、仲間と実行に移す。

日本は、終末期医療についての生前の意思表示「リビングウィル」が法的に担保されていない先進国で唯一の国だ。「イスラエルも同様に厳しいようだ。死の問題に対して真面目できちょうめに捉えるところが日本と似ていると感じた」と長尾さんは話す。ヨヘスケルは、愛する人の認知症という困難にも直面する。長尾さんは「認知症で終末期の人の意思決定を誰がどう支援するのかというのは世界的な課題」と指摘。「映画を見て、自分だったらどうするかということをシミュレーションすること、そして身近な人と話し合うこと。それがとても大切ではないか」と力を込めた。

【花澤茂人】